

だったって(笑)。

犬飼 沼津に大きなお屋敷を建てたとか。

幸綱 それも大半が借金だったんだろ。そんなことで、旅人さんがびつくりしたという話。いい話だね。それは措くとして、牧水が稼いだ基本は選歌だったと思う。

今でもそうです。「歌人だ、歌人だ」とだれでもやたらに名乗るけれど、「年間一千首作って、一千万円、短歌で稼ぐ。それが駄目なら歌人と自称するな」と冗談で言ってるんだ(笑)。評論を書いたり、講演をしたり、カルチャーセンターの講師をしたりしても年間一千万円にはならない。

高山 選歌って、けっこうお金になるんですか。

幸綱 まあ。カルチャーセンターの講師なんかに比べればね。時間のかかり方とか考え合わせると。「サンケイ歌壇」の前に、「高一コース」とか「高二コース」とか、受験雑誌をいくつかやっていて。「大法輪」という仏教の雑誌の選歌もやっていて。若い時代、呑み代はそういうところで稼いで、大学の教員の給料はちゃんと家に入れるようにしていた。嘘だけど(笑)。

高山 メチャクチャ面白い話になってきました。

幸綱 下世話な話は面白いよね(笑)。

黒岩 もう一つ、聞かせてください。新聞によって選の違いはあるんですか。

幸綱 「サンケイ歌壇」はこういうのを選んでくださいとか、「朝日歌壇」はこうですとか、そういう注文は全くない。そういう制約があったら、選者を受けたり受けなかったりすることがあると思うよ。ただ新聞によって、投稿者に一定の傾向はあるかもしれないな。

高山 さらに言うくと、どういう経緯で選者になれるんでしょうか。

幸綱 どういう経緯かはわからないよ(笑)。さっき言ったように、木俣修さんが亡くなつて、それから一か月ぐらいのうちに話が来たから、産経新聞の内部で会議をするとか。もう一人の選者に相談するとか。

加古 先生はサンケイ新聞の日曜版で「いきもの春夏秋冬」という連載をされていたから、その関係かもしれません。

幸綱 ああ、そうか。でも、事情はよくわからないな。新聞社って、相談役みたいな人がいるんでしょ。例えば朝日新聞は大岡信さんが一時期、そんな立場におられたんじゃないかな。「折々の歌を連載していたからね。それぞれの新聞社で文芸関係はだれ、美術関係はだれ、とか相談する人脈があるんじゃないですか。

黒岩 朝日新聞って、系列で選びますね。前川

佐美雄の後は幸綱先生だったり、「アララギ」系の人の後は「アララギ」系の人とか。

幸綱 ああ、そういうバランスはあるだろうね。ある派閥が強すぎたりしたらまずいから。朝日新聞にかぎらず。

加古 「東京歌壇」を先生がやることになったのは、上田三四二さんが亡くなられたのがきっかけです。その時、歌壇で一番いい人を選んだんだと思います。

幸綱 その時、「サンケイ歌壇」の選者をやめました。つまり不文律みたいなのがあって、地方紙と全国紙はいいけれど、全国紙の選者がかぶるのは具合が悪い。たとえば朝日と読売をやるのは具合が悪いというかたちね。

▽長谷寺の新鐘銘文に献歌

高山 次の話題は、一九八三年の長谷寺の鐘のことです。

幸綱 これは一生に一回の体験で、かなり緊張しました。鎌倉の長谷寺に七百年ほど昔に造った鐘文永元年・一二六四年(鑄造)があった。名鐘と言われている、除夜の鐘のとき、ラジオやテレビで中継されていたりした鐘だった。その鐘にちよつと罅が入ったので、昭和新聞を作るといふ話になり、早稲田大学の東洋美術史の教授が寺院や鐘のことも詳しいとい